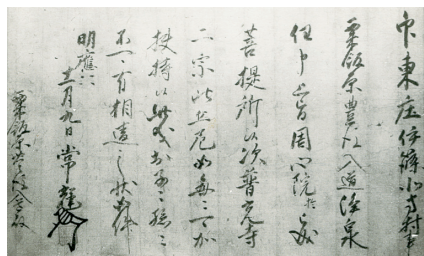


関東の名族 千葉氏の 最後の居城 本佐倉城

千葉氏は、鎌倉、室町幕府のもとで下総を中心に一大勢力を張り代々「千葉介」と呼ばれ、下総守護職として関東有力大名のなかで筆頭の地位にあった一族です。

1 本佐倉城築城

享徳3(1454)年に始まる古河公方と関東管領上杉氏が対立した享徳の大乱は関東全域に広がりました。下総の千葉氏もこの戦乱の中で内紛が起こり、本宗家が滅亡し、一族の岩橋輔胤が継承しました。この輔胤、その子孝胤の時期(文明年間(1469～1487))に、千葉氏の本拠を鎌倉時代以来の千葉から佐倉(現在の酒々井町周辺)へ移し、新たに築城したのが本佐倉城です。



浄泉寺文書(酒々井町伊篠浄泉寺蔵)

2代当主孝胤が、明応4(1495)年に千葉氏一族の粟飯原氏に与えた所領の安堵状。佐倉移転草創期の千葉氏の活動が分かる貴重な史料である。(酒々井町指定文化財)



本佐倉城跡航空撮影(南から)

城の北の現在水田になっている低地が香取の海であった。京成線軌道周囲が当時の汀線で、そこから城の周囲はすべて湿地帯であり、天然の防御壁が備わっていた。

2 下総の首府となる

築城後、市立て町立てが行われ、本佐倉城の周辺には寺院が次々と創建されました。

城の鎮守である八幡神社のご神体を整え、神社の修復も行いました。

3代当主勝胤の時には自身の名をつけた常叡山勝胤寺(佐倉市大佐倉)、常勝山妙胤寺(酒々井町本佐倉)等の菩提寺、祈願寺が建立され、城下の整備が整っていきました。

さらに千葉氏一族、家臣等で構成される「佐倉歌壇」による歌合や、

歌人納叟馴窓による『雲玉和歌集』の編纂等文芸活動も盛んとなり、本佐倉城とその城下は下総の政治、経済、文化の中心となりました。



千葉氏の守護神、妙見菩薩。(酒々井町墨泉光院) 千葉氏系の城のある周辺には多く存在する。

伝千葉勝胤肖像画(常叡山勝胤寺蔵)

3代当主千葉勝胤の肖像画。晩年に出家した姿を描いたとされるもの。僧侶姿で太刀を傍らに置く肖像画は珍しい。



春の日の野原の一本の梅の枝にとって、その脇を歩き来る人々の袖がおこす風であっても胤のようなものであろう。

千葉勝胤『雲玉和歌集』より

かすがなる野べの一本の梅が枝は行きかふ袖やあらしなるらん

3 後北条氏の影響

16世紀中頃以降関東に後北条氏の勢力が拡大していく中、千葉氏は5代当主利胤の早世、6代当主親胤の暗殺等の事変も重なり、徐々にその影響を受けるようになっていきました。7代当主胤富の時には、本佐倉城からたった7kmにある臼井城(佐倉市)まで、上杉謙信に攻め込まれる大きな危機に見舞われました。胤富は千葉氏の所領を守るため、後北条氏と連携を取るようになり、その一方で千葉氏内部への介入を受けるようになっていきました。



「千葉親胤御影」(香取市久保神社蔵)

若くして暗殺された親胤は怨霊となり崇りをおこしたと伝承されており、その御霊を鎮めるために奉納されたと考えられている。(写真:香取市教育委員会)



「上杉謙信臼井城攻めの図」(『成田参詣記』成田山新勝寺)

永禄9(1566)年、上杉謙信による臼井城攻撃の際、臼井城は千葉氏の本城本佐倉城の支城として家臣の原胤貞が守っており、千葉氏、北条氏の援軍とともに守り抜いた。この戦は上杉謙信の生涯の中での数少ない負け戦であった。

佐倉千葉氏略系図

初代 輔胤 — 二代 孝胤 — 三代 勝胤 — 四代 昌胤

五代 利胤

七代 胤富

八代 邦胤

九代 直重

六代 親胤

北条氏政七男

※利胤の子の可能性あり

4 千葉氏と本佐倉城の終焉

8代当主邦胤は北条氏政の娘を妻に迎えました。後北条氏の本城小田原城のかわらけの特徴をもつものが、本佐倉城から出土することや、朱印の使用は、後北条氏の影響を強く受けたこの時代を反映したものでしょう。邦胤の暗殺後は、北条氏政の子の直重が千葉氏当主を継承しました。しかしその直後、天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原征伐において、千葉氏は後北条氏に味方し敗れ滅亡し、これにより本佐倉城も廃城となりました。



龍朱印

8代当主邦胤が使用した後北条氏の影響を受けた印。



本佐倉城のかわらけ

本佐倉城跡城山(Ⅰ郭)出土。小田原城出土のかわらけの特徴をもつ。みこみと器壁との境に沈線をめぐらす特徴をもつもの(写真左)と、沈線のないもの(写真右)の2種類がある。

5 近世佐倉へのあけぼの

千葉氏滅亡後、佐倉支配の新たな拠点となったのは大堀陣屋(酒々井町本佐倉)でした。関東の新たな支配者となった徳川家康は、自身の息子2人を含む家臣達を送り込み佐倉の地を治めさせ、元和2年(1616)頃に佐倉城(佐倉市)が完成し、すべての機能が移転されるまで佐倉支配の中心となりました。



「本佐倉村千葉家故城址の図」(『成田参詣記』成田山新勝寺)

図中にある「万千代殿ヤシキ」が大堀陣屋である。「万千代」とは徳川家康5男武田信吉のことをいう。

◆ 国史跡本佐倉城跡へのアクセス

京成酒々井駅より 徒歩20分
JR酒々井駅より 徒歩25分
京成大佐倉駅より 徒歩10分
東関東酒々井インターより車10分

◆ お問合わせ先

酒々井町教育委員会 生涯学習課
〒285-0922
千葉県印旛郡酒々井町中央台4-10-1
TEL.043-496-5334(直)

◆ 発行/酒々井町

<http://www.town.shisui.chiba.jp/>

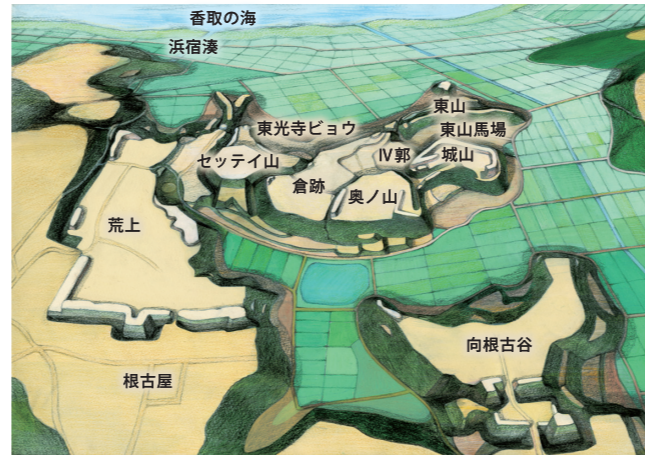


国指定史跡 本佐倉城跡はどんな城?

本佐倉城跡は、貴重な文化財として千葉県で初めて国史跡に指定されました(平成10年9月11日)。

1 巨大な土の城郭

本佐倉城の最終形態は、10の郭と衛星状に配した宿を惣構により囲い込んだおよそ南北2km、東西1kmの巨大城郭です。築城当時は内郭群の一部分程度の規模であり、16世紀後半頃から現在の姿へと整備されていったと考えられます。城の構造は、北総台地の特徴である台地とその奥深くまで谷津が入る複雑に入り組んだ地形を利用し、台地を削り谷を埋め、堀や土塁を配して郭を作った「土の城」です。



本佐倉城全体図

内郭群【城山(Ⅰ郭) 奥ノ山(Ⅱ郭) 倉跡(Ⅲ郭) Ⅳ郭 東山・東山馬場(Ⅴ郭) 東光寺ビヨウ(Ⅵ郭) セッテイ山(Ⅶ郭)】
外郭群【荒上(Ⅷ郭) 向根古谷(Ⅸ郭) 根古屋(Ⅹ郭)】

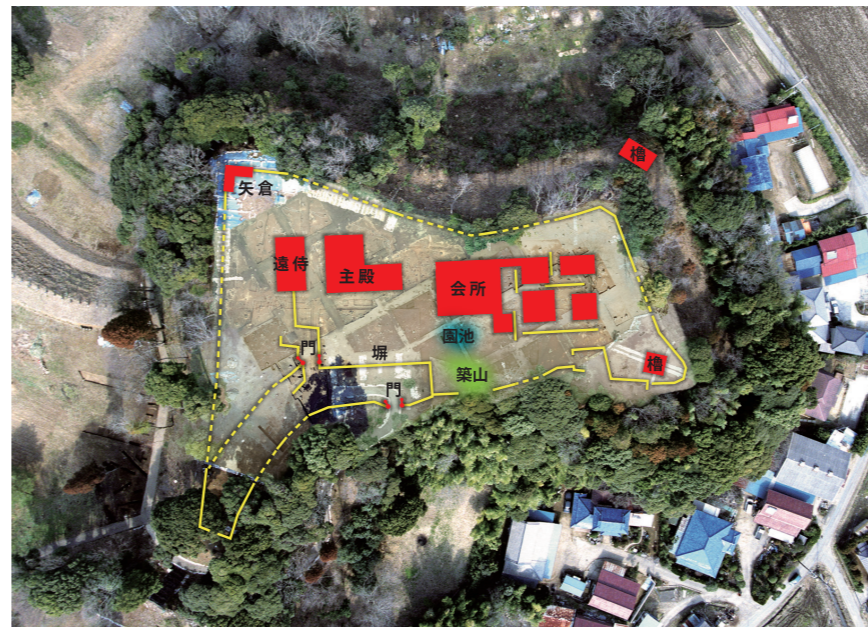


本佐倉城周辺図

城の周囲には佐倉宿、酒々井宿、鹿島宿、浜宿湊が配置された。北側に古河まで通じる水運の大動脈である香取の海が隣接し、南に銚子、芝山、東金、千葉(武蔵)等、東西南北に伸びる街道の交差点があり、水上交通、陸上交通の要衝に立地していた。

2 発掘された千葉氏の屋敷群

城内で最も重要な詰めの郭である城山では、主殿、会所、庭園遺構、門、櫓等で構成される当主の屋敷群が発見されています。また当時使用されたかわらけや瀬戸美濃・常滑産製品、貿易陶磁器類などの遺物も多数出土しており戦国期に歴代千葉氏当主が居城した実感が得られます。



玉取獅子図紋皿 (本佐倉城跡出土)

本佐倉城跡城山(Ⅰ郭)出土の貿易陶磁器である。戦国時代に中国で生産され日本へ輸入されたものである。見つかったのは中央の破片のみであるが、図は、その全体像を復元したものである。



城山で発掘された千葉氏の屋敷群

主殿は当主が執務や客人との対面を行い、会所は客人と宴会等をする場所と推測される。会所の南には庭が作られ茶室と思われる小さな建物が付属している。発掘調査で天目茶碗や茶入れ、茶臼等の茶道具も出土しているため、庭を眺めながら茶を楽しむこともあったかもしれない。